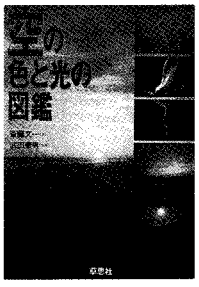

「空の色と光の図鑑」

著者：斎藤文一（文），武田康男（写真）
A5　約180ページ，定価2,900円
草思社　95年10月第1刷

解説書

お薦め度
☆☆☆☆★

本書の構成は，高校の地学教師である武田氏のあざやかな記録写真および各節に添えられた観測ガイドと，新潟大学の超高層物理研究者である斎藤氏による現象相互の関連づけ・分類・科学的な説明から成っている.「素材は空気と水蒸気と太陽光だけなのに,『けっして専門家だけに見つかるのではなく，普通の生活をしている人が，ちょっと空を見上げるという好奇心だけで(美しい光景を)発見できる』」楽しさが全体を彩る.

空の色を紹介する出発点として，まず色の変化を演出するエージェント…主役が空気の分子，脇役が塵粒子や水蒸気…が登場．それらによる散乱と回折を理解することが鍵となるので，図や実例の美しい写真を用いて説明している．第2節では太陽や大気差による様々な現象，次節でまるで紀行文のようにして蜃気楼の数々を紹介．浮島，不知火，狐火など．第4節ではスケールの大きい虹が華やかに現れる．次の節では似たような見え方をする，太陽や月のまわりの光の輪や暈を集めて紹介.このあたりでうっかりすると間違えやすい，水粒子と氷粒子のはたらきかたの違いを詳しく説明している．ブロッケンの妖怪，暈，幻日，彩雲，ダイアモンド・ダストなど多士済々．第6節は，稲妻．落雷や雷の電気のもとを説明して観察時の留意点を述べると共に，セント・エルモの火や火の玉など登場，それから時節柄，地震発光にも言及している．第7節では少し距離の遠い現象であるが，オーロラや大気光にとぶ．アラスカで撮影した縞状やカーテン状，帯状，コロナ状の華麗な姿が並んでいる．日本のような低緯度でもオーロラの見える場合が（きわめてまれだが）あることはあまり知られていないと思う．そして大気光や黄道光は宇宙に思いをはせる中継点．付章では，本当に宇宙に飛び出してしまう．

このようにして，本書では理系の解説が充実しているばかりでなく，歴史上の出来事との関連など文系の内容も楽しく混在している．ワクワクしながら一気に読めてしまうのも，それだけ身近な自然現象を取り上げているからであろう．こんな空の色もあるものかと写真を眺めているだけでもきれいだが，工夫された図解をもとに原理をよく考えながら見ると一層興味深い．

本書の最後に光害への言及があり，美星町の条例を引用しながら環境との共生や省エネルギーについての考察をうながしている．遮音性の良い，空調の効いた建物に閉じこもっていると，どしゃぶりの雨にも気づかないようなこのごろの生活．ところが日本という国では実は多様な気象・風土が多彩な現象を示しているのであって，その紹介を通じて本書では自然観察のダイゴ味へと期（せず）して誘導している．このごろ皆さん，自分で空を見上げてはいないのじゃありませんか．

それでも天文月報の読者であれば，天気予報に頼り切りではなく，自分でもローカルな気象やそれに由来する珍しい現象を把握するようつとめている人が多いと思う．時間的にも空間的にもローカルな気象の変化を，現地の条件を観察することから予測し，行動予定に臨機応変に応用すると旅をしていても一層楽しくなろう．この本を見ていると，つい自分でも戸外に出て自分なりの空の色と光の「標本探し」を始めたいという気をそそられる．

林　左絵子（国立天文台）